

# 高き志【こころざし】

## 「道徳」と「資本主義」

「会社に出勤するため、いつも通りJRに乗って日経新聞を開いた。ふと目をやると、車内吊り広告にサッポロビールのうまそうな新製品の宣伝がある。帰りに買って帰ろうと思いがら、お金を下ろすのを忘れていたことに気づき、会社近くのみずほ銀行のATMに寄る。

そういえばもう年末、クリスマスは帝国ホテルで過ごして、初詣は明治神宮にでもいくなあ。その前に聖路加病院に入院している祖父のお見舞いに行かなくちゃ…。」

東京における、日常の心象風景だが、驚くなかれ、ここに出てくる固有名詞（太文字）すべての設立に関わった人物が、「渋沢栄一」なのだ。

この文章は、連休を利用して読んだ「論語と算盤（渋沢栄一口述を現代語訳）」の「はじめに」に書かれている文章です。ご存知のように「渋沢栄一」とは、現在放送されている大河ドラマ「青天を衝け」の主人公であり、次の一万円札に肖像が入ることで注目を集めている人物です。「日本の資本主義の父」とも言われ、上にもあるように、およそ500の会社と600の教育福祉事業の設立に関与した人物です。最近のブームもあり、私も彼に関する本を2冊読んでみました。本の内容に詳しく触れる紙面の余裕は有りませんが、彼の名言の中の一つに次の言葉があります。

「論語と算盤というかけ離れたものを一つにするという事が最も重要なのだ。」

この文だけ読んだのでは、意味がよく分からないのではないかと思います。…彼は資本主義の本質を早い段階で見抜き、「資本主義」や「実業」とは、自分が金持ちになりたいとか、利益を増やしたいという欲望をエンジンとして前に進んでいく面があり、暴走をする危険があると考えたそうです。したがって、「資本主義」には暴走に歯止めをかける枠組みが必要だと強く思ったのだそうです。その歯止めをかける手段が「論語」だったとのこと。ですから、私が読んだ本の題名が「論語と算盤」となっているのです。この時代ですから「論語」ですが、現代の私たちが考えれば「道徳」と考えていいのではないのでしょうか。「算盤」は「資本主義」のことを言い換えていると考えられるでしょう。そう考えるとこの本の題名は「道徳と資本主義」と言い換えられないこともないと思います。

今私たちが暮らす豊かで便利な時代は、彼が日本に広めた「資本主義」で築かれました。しかし、成長した資本主義は、後戻りはできない様々な課題も生んでいます。「厳しい挑戦の時代」「社会構造や雇用環境が大きく急速に変化している」「予測困難な時代」…これら三つの言葉や文は、いずれも学習指導要領解説（総則編）の冒頭部分に書かれてあるものです。このような難しい時代を生み出したのも「資本主義」と言っていいでしょう。このように考えれば、栄一が資本主義の暴走に歯止めをかける手段として考えた「論語」がますます重要になってくると思います。今の小学校で論語を教える機会はありませんので、やはり「道徳」が重要だと言えないのでしょうか。一人1台のタブレットが入り、ICT活用能力の重要性が叫ばれています。社会もそのような能力をもった人材を求めているでしょう。今後AIが社会を大きく変化させていくことは間違いありません。それらに対応できる力を子供たちに身に付けさせることは大切だと思います。しかし、同時にそれを活用する時に「人としてどうすべきか、人としてどう生きるべきか」をしっかりと考えることができる力がそれ以上に重要になると思います。「論語と算盤」にはそのような示唆が含まれていたように感じます。

この連休は、渋沢栄一を通じて「道徳」の重要性を再認識する機会になりました。